

る點だと思ひます。かゝる繪はいつまで見てゐても見飽のせぬものです。

▲寫眞版のエツチンクは簡潔なよい繪であり、銅版と申しても彼地には一枚百圓二百圓の品は珍らしくありません、それは皆畫伯自ら彫刻したもので、甚しいのは五六枚刷つて後は版を潰して仕舞ふため其やうに高價となるのであります。

寄書

水彩畫と宗教

評者 丁日生

人の一生進を通じて、最も愉快に、最も希望に満ちてあるべき青年時代を、僕は今淋しく病牀の上に過しつゝある。

此悶々の情を宗教に依て慰せんか、それには僕の頭腦が餘りに科學的である。

處が水彩畫を習ひ初めてから、僕は一枝の畫筆に依て、然もいかに多くの慰藉を得つつあるであらうかよ。

實に水彩畫の人の心をヒューリテイーならしむる力は、遙に迷信多き宗教の上にあると思ふ。水彩畫を學ぶ多くの青年諸君の中には、僕と感と同ふせらるゝ方も少くないと考へる。

手製の三脚床几

篇知山 今永 英世

三脚の必要は毎度感じるのですが、東京から取寄せるのも高價につきし、土地には賣つておまへせん、因ていろ／＼工風の上、妙な道具を案出しました、御同感の諸君の御參考迄に御報致します。

まづ餘り太くない一尺五寸位ひの丈夫な竹を三本とつて、上から五寸位ひの場所を針金線で強く固く結び、脚を三方に擴げて、上に出來た三端には、一尺四方位ひの稍厚い板を置き、丁度其竹の端の上に、五寸釘の自由に通る程の穴を穿ち、其次より竹の中へ釘をさして板の沁らぬやうにします。釘さへとれば、自由に疊めて、持運びにもさして不便ではありません。

水彩畫に志せし動機と

初寫生

中藤 英三

私は元來繪が好て、小學時代から毛筆鉛筆畫などを書いて居た、學校を終へて遊學の身となり、居候生活の内、朝夕文房堂の店先

に、第一に目につくのは水彩畫で有る。繪が好て有るから能く見て來ては厚紙へ極安の繪具で畫て見たが面白くない、是非水畫を學び度いと思ふ内東京堂で水彩畫の乘を見出し早速それに頼よつておぼつかなくも畫き初たのが明治卅六年の三月。東京をよして郷里へ引き込でから、やたらに水畫の手本を買つて習つて居るうち少しは、水彩畫らしいものがかけて來た、そこで一番戶外寫生を試みんと自分作りの三脚椅子をかつき出して、田の中の三ツ橋と云ふ所を寫生して見たが、机の上と事かわり思ふ様に色の配合も出來ず筆も廻わらず、いやはや畫にならばこそ、實にお可笑な物が出来た、内一番むずかしいと思つたのは、立木と橋へ日光の射した具合と田面へ寫る樹木の具合であつた。

各地寫生會

●いもや會。所在遠江國山梨町○會員松村操、比奈地畔川、幡鎌由一、石塚非石、鈴木無里、内藤六丁其他○隔月一回集會自作の水彩畫を陳列して批判投票を行ふ(内藤